故郷第七場面　読んだ読んだ

三年三組　氏名

それからまた九日して、わたしたちの旅立ちの日になった。ルントウは朝から来ていた。シュイションは連れずに、五歳になる女の子に船の番をさせていた。……すいか畑の銀の首輪の小英雄の面影は、もとは鮮明この上なかったのが、今では急にぼんやりしてしまった。これもたまらなく悲しい。

主人公は悲しかった。たまらなく悲しかった。昔は、神秘の宝庫のような持ち主だったルントウが、今では生活苦からヤンおばさんのようにひどく汚れてしまったからだ。自分から苦しい生活をアピールし、主人公の同情を誘うだけでなく、主人公の許可もなく物を持ち去ろうとするような卑劣な人間になってしまった。主人公は美しい故郷の象徴だったルントウの変わり果てた姿を見たとき、ただただ悲しくなり、故郷や故郷の人々との別れを名残惜しく感じなかった。　さん

主人公は、ルントウが灰の中に碗や皿を隠していたと知ったとき、自分が利用されていたことに気付き、幻滅した。主人公の、故郷に対する思い出の象徴と言える「すいか畑の銀の首輪の小英雄」は、もうどこにも存在しない。そうなってしまった今、もはや故郷に対する思い出は残っていない。そんな故郷は彼の中で薄墨色に変わり、次々と消えてしまった。

もとは鮮明だった思い出が、今ではぼんやりと消えてしまったことに、主人公はたまらない悲しみを覚えた。　くん

主人公の旅立ちの日になった。ルントウは朝から来ていたにもかかわらず、主人公とは何も話さなかった。また、ルントウは灰の中に碗や皿を隠していた。これらのことからルントウが来た目的は、物をもらうことだったと考えられる。主人公は、ヤンおばさんも神秘の宝庫の心の持ち主であったルントウも悪い人になったしまったことに対して、たまらなく悲しく感じている。主人公が片時も忘れることがなかった故郷は、もうなくなってしまった。だから、故郷を離れることに対して、名残惜しい気はしないと感じている。　さん

主人公は、信じられなかった。神秘の宝庫のような心を持ち、主人公にとってあこがれの存在でもあったルントウが自分の子どもを連れてきて、生活が苦しいことをアピールしたりして、挙げ句の果てには主人公に内緒で灰の山の中に碗や皿を入れたりして、ドロボウ猫のようなことをする人間に変わってしまったことに気付き、故郷を旅立つ悲しみよりもルントウが変わってしまった悲しみの方が大きかった。　さん